



会員 安部 敏広

弁護士生活5か月の雑感

はじめに

私は、昨年12月に弁護士登録し、現在、千代田区内の法律事務所勤務している。この度、LIBRA リレーエッセイの新第61期トップバッターを担当させていただくことになり、大変に光栄である。

自分の事件という感覚

二回試験発表の翌日である平成20年12月19日、私は、意気揚々と事務所に出勤した。一通りの挨拶を終え、割当てのデスクに腰を下ろしたところ、

「引継ぎなんですけど。」「…」

「上の段の資料がすべて〇〇事件で、書面提出は〇日までです。」「…」

「ではお願いします。」「あれっ？」

こんな感じで、現在まで至っているというのが素朴な感想である。

入所当初は、膨大な記録を見ても、事案が全く頭に入ってこなくて悶々としていた。ところが、実際に依頼者と会って話を聞いたり、現場に赴いたりすると、不思議なことに、瞬時に頭が整理され、自分なりの主張や反論が浮かんでくる。依頼者の顔が見えると、自分の事件として何とかしてあげなければという気持ちが生じてくるものである。そうすると、他人事やたんなる仕事ではなくなる。自分自身の事件という感覚である。

司法修習時代に、事件記録を見ても、よく頭に入らなかった理由が今頃になってわかった気がした。

法律相談はむずかしい

当事務所は、一般民事事件を中心に扱う事務所であり、訴訟と法律相談の占める割合が高い。多くの依頼者が様々な事件を持ち込んでくるため、バラエティは極めて豊富である。

所長とともに法律相談に入ると、とても勉強になる。依頼者はとりとめのめのない話を続け、法律相談ではなく

人生相談の様相を呈することがしばしばである。それでも所長は、的確にポイントを拾い出して話の交通整理をし、ときには依頼者を叱咤して依頼者が顔を真っ赤にして怒ることもある。それでも結局、この依頼者は所長に怒られたくて相談に来たのかなと思うこともある。

所長の横にいる私は、下調べをした知識を精一杯活用して自分なりの結論を出すのだが、大概いつも採用されない。所詮、私の結論は、たんに事実の表面を捉えて教科書の基準に当てはめるだけで、思考が核心にまで至っていないからである。

法律相談はむずかしいなあ、と思ってしまう。

いまは基礎固め

私は、司法修習時代より、自分の専門分野を開拓して、困難な弁護士業界を乗り切っていこうと思っていたが、今はあまりそのように考える余裕がない。

なぜなら、弁護士としての初歩的技術を身に付けていなくては、日々仕事にならないからである。例えば、建物明渡請求であっても、法的にはこうで、手続がこうで、留意点はこうで、と頭では分かっている、実際に何から手をつけて良いかわからず、兄弁護士に泣きつく始末である。

今は、できるだけ多くの事件にあたり、実務経験を積んで、基礎固めをすることが大事であると思っている。

さいごに

弁護士生活5か月が経った今、自分がこれまで社会人経験で培ってきたものが音を立てて壊れ、ほんの1つ2つの何かが生まれたかな、と感じている。

弁護士業は、やはり特殊な職業であり、その職責は重大である。郷に入れば郷に従え、隗より始めよ、まずはあせらず、道程は長いので、じっくりと腕と人間性を磨こうと思う。